



UNESCO主催の伝統音楽に関する講義を履修したアディスアベバ大学大学院生と一緒に

人々が集まってくる。発掘許可が欲しいと言うと村長さんの所に連れていってくれるし、村に泊めてくれる。発掘作業の終了時には、チキンのシチューを振舞って労をねぎらった。現地では牛でパーティを催すのが慣例だが、大学院生の身ではチキンが一杯。それでも二年半余りの調査を支えてくれたのは、学部をファーストクラスで卒業したときに得た奨学金のお陰であった。テント生活をしながらの発掘作業で得た資料が、博士号論文となった。

🌟国際職員としての基礎を 培ってくれたUWCで学んだこと

イギリス、スワジランド、フランス、そしてエチオピアと、一〇代半ばから今日までいろいろな国で暮らし、さまざまな文化

を持った人々と接してきた。どこに住んでも、またどんな仕事であっても、心から楽しんで挑戦しようという気持ちでいる。多文化の人と共に暮らす際に、一番必要なことは、違いを認め、自らの心を開くことであり、そのためにも「自分で考える」ことが大切である。いわゆる社会人としての基礎力といえるものを、私は高校時代に過ごしたACでの二年間で培ったように思う。

ACでの勉強はごんまりしたクラスでの対話形式の授業が中心で、試験は論文形式が特徴である。一番大変だったのは西洋史。それまで私の勉強した歴史は年代や人物名を暗記することだったから、一つの歴史的事象を自分なりに分析して文章を書くという慣れない作業には相当苦労した。

「教科書の文章を使わずに、あなたの考えを聞かせてほしい」と西洋史の先生が書いてくれたコメントが忘れられない。ACには約七〇カ国から生徒が集まっていたから、それぞれ考え方が違うのは当たり前。たった一つの正しい答えは存在し得ない環境の中で、自分の考えを確立し、同時に他の人と折り合いを大切にしながら物事を進める姿勢を学ぶことができた。

ACではいろいろなことに挑戦した。ピアノやヴァイオリンの練習に熱をあげてカレッジのコンサートで演奏したり、老人ホ

ームで二週間泊まり込みで働くボランティア活動もした。休暇はヨーロッパ各地の旅を楽しんだ。海難救助隊の訓練、マウンテンバイキングやロッククライミングなど野外でのスポーツもやってみた。自分がしたいものは何か、私なりに模索していたのかもしれない。

日本風に言えば卒業生代表であろうか、カレッジを卒業する晩餐会で恒例のスピーチを仰せつかった。国際理解と口で言うのは簡単だけれど、価値観が違う人が一緒に住むときに、実際にはどうやって生活をすればいいのか、心を込めて話した。どんなに背景が異なる人であっても、自分から心を開いて接すれば、大抵の場合は通じ合うものがある。周囲の人との信頼は特別なことではなく、挨拶や会話などの日常の態度を通して育まれるものであることを身近に感じたのも、ACでの生活であった。

🌟旅は続く

つい数週間前にユネスコのケニア・ナイロビ地域事務所への異動通知を受け取った。これからまたどんなチャレンジャーや出会いが待っているのだろうか。どの国にも未来に残すべき貴重な遺産がある。そのような文化遺産の保護と推進にこれからも元気に貢献していきたい。

UWCで培われた 国際職員としての基礎力

一九九二—一九九四年、UWC日本協会の派遣生としてUWC英国アトランティックカレッジ(AJC)に留学。九七年、英国オックスフォード大学考古・人類学卒業。二〇〇一年同大学院考古学科学博士号取得。南アフリカ・ケープタウン大学大学院考古学科学研究員の後、外務省試験に合格し、二〇〇三年からアンシエート・エキスパートとして国連ユネスコのパリ本部世界遺産センター勤務。二〇〇五年よりユネスコ・アディスマバ地域事務所(エチオピア)に勤務し、現在に至る。



国連ユネスコ・アディスマバ
地域事務所(エチオピア)
文化プログラム・スペシャリスト

大日向史子

おひなた ふみこ

ユネスコ…驚きと発見の連続、 そして多文化理解の大切さ

現在、私はエチオピア高原の首都アディスマバのユネスコ地域事務所での文化のプログラム・スペシャリストとして働いている。主な業務は有形・無形遺産や手工業保護、文化産業育成、博物館支援、文化方針改革。ユネスコとは、教育・科学・文化の発展と推進を目的として一九四五年に設立された国連の専門機関である。そのユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」との文言が記されている。国際機関での仕事は文化や宗教、

価値観を異にする人との共同作業であり、意見の相違や衝突も稀ではない。国際職員としての勤務にはUWC時代の教育で培われた多様な価値観を尊重する姿勢が欠かせないことを実感している。

二〇〇五年にエチオピアに赴任した当初、仕事に必要な資料の提供を求めたが、出された書類は「一九九七年」のものだった。

丁重に礼を述べつつも最新のデータが欲しいと言うと、政府担当官は怪訝な顔をした。一年が一三カ月からなるエチオピア暦と西暦との間には七年九カ月のギャップがある。提供してくれたのは最新の資料だったのである。悠久の歴史と八〇以上の言語が混在する文化的背景を持つエチオピアでの仕事

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。

は、日々、発見と驚きの連続である。

エチオピアに赴任する前は、ユネスコ・パリ本部の世界遺産センターで東欧・中欧の遺産保護に関する仕事についていた。この間、二年半、私のパスポートは訪れた国々の入出国記録のスタンプで埋め尽くされた。世界遺産を訪ねる旅は人類の偉業の跡や自然美に深い感慨を覚えるが、その保護には現在の政治経済の思惑が複雑に絡んでくる。リトアニアとロシアにまたがるキュロニーアン・スピット(クルシュー砂州)の世界遺産の保護では交渉が難航したが、最終的に共同文書に両国が署名するまでを見届けることができた。

アフリカでの発掘

ユネスコでの勤務は、オックスフォード大学で専攻した考古学・人類学の研究を活かすことを希望してのことであった。大学院時代にはアフリカ南部のスワジランドという小さな王国で、鉄器農耕時代の遺跡を発掘調査した。単身小型トラックで現地に入ると、珍しさからかどこからともなく